

すためであった。

考古学専攻では一九八八年に初めて大塚が文学部長になり、九〇年五月には日本考古学協会会長となった。戸沢充則教授は九〇年に史学地理学科長、さらに文学部長をへて一九九六年四月には、明治大学学長の重職についた。考古学専攻ではこの間、小杉康助手を迎え、小林三郎教授が専攻主任と考古学博物館長となり、新しい考古学世界を目標に前進を続けている。考古学博物館も新しい体制となり、専任学芸員に黒沢浩・島田和高両氏を迎えた。一九九七年三月末には大塚が四〇数年の教壇に別れをつげる。岡山大学から移籍していた阿部芳郎助手は四月から石川日出志教授とともに専任講師として活躍が期待されている。これまで助手だった小杉康氏は九七年四月から北海道大学助教授に転出した。

筆者は考古学専攻卒業のおり、丁度四〇年も前のことだが級友らと相談して『駿台史学』の創刊に力を盡したが、いま定年で明治大学文学部を去る時に、一〇〇号が刊行されるといのは奇縁のようにも思われ、筆舌に盡しがたい感動を覚える。考古学専攻は永久に他専攻より創設の歴史は一年若い。

《駿台地理学》の学風形成期を想う

—岡山俊雄・渡辺 操両先生のことなど—

石井 素介

いま時、一大学一学科の《学風》をことさら話題にすること自体、あるいは時代錯誤なのかもしれないのだが、史学地理学科共通の機関誌である『駿台史学』が記念すべき第百号の画期を迎えるに当たって、とりわけ地理学教室の半世紀の歴史をふり返ってみる時、何はさておきこの学風の伝統という点だけは強調しておきたいという思いを禁じ得ない。とくに日本の大学が横並び画一化からの脱却を求められ、学部学科の独自性の創出が要請されている時代であればなおさら、この際、伝統ある教室の学風の成り立ちに想いを致すのも、あながち意味の無いことでもなからうと思うからである。

とは言っても、私自身は、史学地理学科の草創期や駿

一〇〇号刊行にいたるまでの恩師・先学・先輩並びに明治大学関係者の援助とご協力がなければ、記念号の刊行はなかったと思う。ここに考古学専攻五〇年の歴史を想い、さらなる考古学の学問的発展を期待して回想の筆を措く。

(明治大学文学部教授)

台史学会の発足期当時のことは、体験的に知っているわけではなく、多くの人々の談話や記録から間接的に聞き及んでいるに過ぎない。私が明治大学に勤務するようになったのは一九五六年四月のこと、これは考えてみれば、波瀾万丈の昭和二十年代が終り、わが文学部においても、苦難の草創期が一段落して、いよいよ飛躍期を迎える、丁度そういう時期に当たっていたわけである。

他方、昭和四十年代の中頃、一九六八年から七〇年にかけて学生運動による紛争の大波が世界の諸大学を襲い、旧来の学問研究と教育のあり方に大きな衝撃を与えたのは周知のごとく、わが大学もその例外ではなかった。ことに地理学専攻の場合、後述のように、激動さなかな一九七〇年早々に大黒柱の一人である渡辺操教授を喪たうえに、教室スタッフの大幅な世代交替の時機に際会したこともあって、地理学教室としては研究教育態勢の点でもこの時期に大きな転機を迎えることになった。これに加えて、私自身がたまたま一九六九年から七〇年にかけての一年間在外研究で日本を留守にし、肝心の大学紛争の現場に居合わせなかった関係もあって、この期間に残念ながら私自身の教室史追想にとってもひとつの欠

落部分となっている⁽¹⁾。そのような事情から、そしてまたこの時期以降の教室史については、今後また誰かが別に取り上げる機会もあろうかと思われるので、ここでは一九七〇年頃までの時代を中心に話を進めることにしたい。

地理学のインキュベータ(孵卵器)としての駿台史学会

こんな小見出しを掲げて話をはじめると、あらぬ誤解を招きかねないが、草創期以来の駿台地理学の歩みを虚心に振り返ってみて、これはまず第一に浮かぶ私の実感である。一九三二年の明大文科専門部史学科発足以来の全体的経過は、幸い一九八四年に刊行された『明治大学文学部五十年史』および『同・資料叢書(全十二巻)』の記述に詳しい⁽²⁾。そこには史学の大きな懐に包含されて出発した駿台地理学が、時代の激動に揉まれながら次第に独り立ちしてゆく姿が如実に描かれている。さらに、旧制専門部時代の地理学教室の実情については、最初の二年間だけ地理の講義を担当した東大の辻村太郎教授の後を承け、一九三四年以降終始一貫して地理学教室の中心的存在となった岡山俊雄先生が、『駿台史学』第三五号

(先生の古稀記念号)に自ら記された「地理学教室の歩み」(以下「岡山手記」と略称⁽³⁾)やその後地歴科時代を回想する座談会で語られた談話などで詳しく跡づけられており、また、新制文学部の地理学教室の成立経過とその構成員の人物像等については、松田孝教授により前記『五十年史』の「教室小史・地理学専攻」⁽⁴⁾の中で体験的に活写されているので、ここではそれらの詳細は繰り返さないことにする。

これらの記録を通してみても、いわば歴史学に取り囲まれて育ってきたという駿台地理学の成育事情の特徴は明らかである。新制文学部の初代学部長であった渡辺世祐先生の学科構想は、もともと史学科の中に地理学専攻を含み込む京都大学のパターンであったように、初年度は「史学科」で出発した学科名が翌年「史学地理学科」と改称される際にも、「教授会で岡山先生と多田文男先生が立って(その必要性を)縷々と訴えられた印象的な場面」⁽⁵⁾があつて漸く決まったのを、後に杉原荘介教授が回想されている。この名称変更にいたる事情は、直接的には受験生の過小に悩まされていた当時の文学部の学生募集上の必要性にあつたと思われるが、その後の経緯か

ら考えるとこれは一つの象徴的なできごとであつたと言えるかもしれない。

それは、自然地理のスタッフを持たない京大型の地理学専攻が、一般に人文地理、特に歴史地理重視に片寄る傾向を示しているのに対して、わが駿台地理学の場合、それとは明らかに異なる歩みをたどっているからである。逆に、本学における歴史学・考古学スタッフの研究活動の中にも、例えば地方史・村落景観・空中写真判読・層位学・粘土鉱物分析等の地理学的(ないしそれに関係の深い)分析手法を駆使した、事実上《歴史地理学的》研究と言つてもおかしくない研究成果が多数見られ、地理学の側も駿台史学会の活動等を通じて日常的に史学との交流ができるという恩恵に浴しているわけである。

大学の学部学科の区分を最初から理系・文系に分類して毫も怪しまない現代日本では、他の分野の専門家は信じ難いことかもしれないが、地理学はその成り立ちからしていわゆる文系・理系の両方にまたがった学問分野なのである。内容的に専門の細分化が進んだ今日においてさえ、世界各国の代表的な地理学専門雑誌には自然地理・人文地理の両分野の諸論文が併存しており、また、

ほとんどの諸大学地理学教室には自然地理と人文地理の両方のスタッフが連带的に共存しているのが普通である。他方、日本の図書館では、地理の専門書が図書分類枠のあちこちに散在していて探索に苦労するが、これは地理学に問題があるというより、日本での現行の学問・図書の分類基準の方に問題があるのではないだろうか。ちなみに、地理学は日本学術会議の構成区分でも第一・三・四部に分割所属する異常な形であり、また文部省の科学研究費の審査部門区分でも、はみ出し分野の複合領域に所属させられている。これでは、資源・環境・災害など、自然・社会・文化の諸分野にまたがる現代的な課題に正面から取り組めるという、せっかくの地理学独自のアプローチの可能性が、学問として正當に位置づけられているとは言えないのである。

もちろん、地理学の内部においても研究分野の専門分化の傾向が著しく、かつての様に一人の研究者が自然地理・人文地理の両分野の専門的研究を同時に遂行するような芸当はほとんど不可能に近くなってきている。ことに、一専門分野で得られた知見や分析モデルのアナロジーを、安易に他の専門分野に適用するような愚行は、お

互いに敵に戒めるべきことは言うまでもない。しかし、だからといって地理学の内部で他の専門分野に全く無知・無関心であって良いということにはならない。その意味で、岡山先生の時代から、本学大学院地理学専攻で、担当の全教員・全院生参加の合同ゼミが毎週実施されていることの持つ意義は重要である。地球環境や情報・エネルギーなど学際的取り組みを要する課題が続出し、学問のボーダーレス化、パラダイムを超える複眼的思考が要求される今日、専門のたこ壺に籠もるのは到底許されることではない。たとえば、環境論の克服についても、自然と社会との関係を認識論のレベルにまで下りて「通態」概念を軸に動態的に把握し直し、素朴な環境決定論を厳しく批判すると同時に、返す刀で和辻風土論の内在的評価と的確な批判を避けてきた日本の地理学者の怠慢を指摘するフランスの地理学者オギュスタン・ペルクの風土理論⁽¹⁾は、地理学の境界領域を大胆に乗り超えて行くその柔軟思考のあり方に、学ぶべき点が大きいと言わねばならない。

以上に述べてきたことから明らかなように、日本の学問世界の中に占める地理学の位置付けは、遺憾ながら

後もひとつの孵卵器（インキュベーター）としての役割を果たしてくる可能性を持ち続けるものと、改めて意を強くするのである。

フィールドから思索へ・思索からフィールドへ

ところで、明治大学地理学実習室の窓際には二つの額入り肖像写真が掲げられている。いうまでもなく、それは新制文学部地理学教室創設以来の大黒柱であった岡山俊雄（一九〇三〜一九八七年）・渡辺操（一九〇八〜一九七〇年）両先生の遺影なのであるが、果たしてこの実習室に出入りする在学生に、一体どれくらいこの名前の由来が知られているのであろうか。これから先々のことを考えると、まことに心もとない思いである。そこで、せめてこの両先生がわれわれ後進の者にどのような学風の伝統を遺して行かれたのかという点について、その片鱗なりとも書き記しておきたいと思うのである。

今日では、ゼミ単位での現地調査を中心とする夏季実習とその研究成果の学生主催による発表大会である年末の駿台地理談話会の開催とが、すっかり定着している点にも見られるように、フィールドワークの重視が明大

まだまだ未成熟で高い地位を占めるとは言い難い。その上最近では、全国の幾つかの有力大学で大学院拡充等に際して時代を先取りする《国際・環境・情報》などの先端用語を冠する学科名に変更するのが流行し始めているようで、《地理学》という名称は、早晚学科名から消滅してゆく運命にあるのではないかと、極端な説も出ていると言われる。

《地理IIゲオグラフィア》という名前の伝統を尊重するかどうかは、考え次第の問題であるが、日本の現状における地理学の地位の低さや内容の弱体性を嘆くあまり、焦って若者にもっと魅力のありそうな学科名称に飛びつくというようなやり方は、到底有効な解決策とは考えられない。それよりも、本来《地理》という分野が持っていた素朴な魅力に改めて根を下ろし直し、社会的な有効性を取り戻すための学問的な内容充実を図る以外に解決の道はあり得ないのではなからうか。その意味で、広範な人々にとって絶大な魅力の対象の地位を保ち続けている《歴史》と地理との組み合わせという現在の学科組織の形、従ってまた駿台史学会という共存の場合は、駿台地理学にとって、これまでもそうであったように、今

理の長年にわたる伝統であることは広く知られている。事実「岡山手記」によると、戦前の専門部時代の発足当初から地理の科目の中に「地理作業（後に実習見学と改称）年三回」の定めがあり、現在の地理学実習と同様、三浦半島・修善寺・上野原・長瀬・榛名山・鋸山・大島等へ出かけている。時には諏訪・塩尻峠のような遠出も行ったようである。実習のテーマは主に地形図を持って現地の地形や土地利用を観察し特徴を把握することに置かれていたようであるが、やや趣の変った実習としては、銀座・新宿・浅草の商店街調査（佐々木彦一郎講師指導）、歩測と磁尺による駿河台一部の測図（岡山先生指導）、帝劇で「新しき土」を見る（山口貞夫・岡山先生指導）等が挙げられている。実習対象の選び方から、当時としては斬新な教師側の指導目標のあり方をうかがう事ができる。

こうしたフィールドワークの励行は、地理の世界では当然の事であって別に珍しい話ではない。しかし、岡山先生の実習目標は単にフィールドを歩き回る事自体に置かれていたわけではない。目標の第一が、地理学の基本的技法である空間位置への直感力、地形地物配置の観察

と測定等の手法を現地で修練する事であったのは言うまでもないが、それに留まらず、言うなれば現地に立って考えること、つまり、先生自身が長年実践してこられたように、現地で観察する現象の背後に大地の理法を見抜くことの楽しさを、学生達に少しでも理解させようと努力しておられたのではないだろうか。

岡山先生には、実は書齋の人、思索の人という一面が濃厚にあったと思われる。地形図の丹念な讀図から積み上げられた切峯面図を相手に、気の遠くなるような頭腦的格闘を通じて日本列島の地形構造という大構想に到達されたのは有名な話であるし、特に一九五〇〜六〇年代の頃には、世界各国の地理学の古典的名著や代表的な地理学専門雑誌のバックナンバーの徹底的収集整備のために、大学図書館の奥村司書長と連携しつつ異常なまでの執念を燃やしておられたのを良く覚えていた。地理学分野の古典的洋雑誌のバックナンバーの整備状況に関しては、日本の諸大学の中でトップ級と評価され羨ましがられるまでになっているのも、当時の岡山先生の頑張りによるものと言っても過言ではない。

一九六〇年度になって、ようやく岡山先生は在外研究

わが地理学教室のもう一人の大黒柱、あの謹厳で洒落な東京っ子であった岡山先生とはまことに絶妙のとり合わせであったのが、ほかならぬ渡辺操先生（以下、昔のよしみで操さんと呼ばせて頂く）であった。大学紛争の余燼さめやらぬ中で、三十年間にわたる先生の直後、岡山先生は追悼文の中で、三十年間にわたり教え子・友人・同僚としてその歩みを身近に見守って来た操さんに、「先生をさしおいてサッとあの世行きのバスに飛び乗ったかのような」その逝き方を、深く悔やんでおられる。先生の表現をお借りすれば、「まめで、人がよくて、頼まれれば断ることができず、おのずから仕事も交際の範囲も手広くなり、次第にますます忙しくなって、しかもそれが苦にならない」という、無類の活動家としての操さんの人柄に根ざす特徴は、地理学専攻のわれわれ同僚や学生達にとっても、活動エネルギーの重要な源泉であったと言ってよいであろう。

というのも、その一見縦横無尽で取捨不能であるかのように見える講義や実習・現地調査など、操さんの諸活動から時おり放射される学問・教育への不屈の闘志は、操さんに親しく接した人々に強烈な印象を与えずにはお

の機会を得て、かねて念願の世界一周の旅に出発された。先生はまずアメリカ大陸を横断し、北欧から南欧に至る主要諸国を回ってこられた。後で伺った話によると、かねて熟読されていた、例の地形輪廻説で有名なW・M・デーヴィスの著書を始め、地形学の名著論文に出てくる欧米各地の主要な地形標本例示地区をあらかじめメモしておいて、旅行の途上、片端から順次それらを現地で観察し確認して回って来られたのだという。例えば、ライン川中流のアイフェル山地上のマール地形の典型地域として有名なラーハー湖岸を訪ねた話を聞いた時など、私自身よく知っている場所だけに、あんなただでも交通不便な僻地に、よくも五十歳代半ばを過ぎた先生が重いカバンを提げた単身のバス旅行で行かれたとは、さぞかし大変なことだったろうと驚いたものであった。このことからもうかがえるように、先生はやはり単なる思索の人ではなく、思索の結果をフィールドに立って認識し直すにはいられないという、あくまでも現地尊重主義の一面を持ち続けておられたのである。

地域人の視点・体当たりの地域研究

かなかったからである。こうした操さんの存在そのものが醸し出していた雰囲気は、岡山先生との相乗効果のもとに、地理学教室に独特の学風を生み出す土壌となつたのではないかと思われる。

操さんこと、渡辺先生が生涯をかけてわれわれ後進に遺されたものには、岡山先生も前記追悼文の中で強く指摘されているように、あまりにも多面的であつて、われわれの安易な評価を許さないところがあることも確かである。しかし、それを探る手がかりがないわけではない。ご逝去から丁度十年が経過した一九八〇年、操さんを偲ぶ会が催されたのを機会に追懐文を集めた小冊子⁽⁹⁾が刊行されたが、そこに操さん自身が書いた自伝の一部が収録されている。これは、札幌で発行されている雑誌『北海道教育評論』に、一九六五年から六七年にかけて連載された「一地理学者の生涯・回想」からその一部を抜粋したものである。その元原稿となったのは、その当時、操さんとは青年期以来の親友であつたという同誌石附社長の好意により送られてきた同誌一九号分のコピー⁽¹⁰⁾である。この回想記には、同誌連載の十九編合計一一九頁にわたって、操さんの前半生がこと細かに描き出されている。

改めてこの自伝の全編を読み直してみると、中等学校進学を断念し、弱冠十五歳で網走在の小学校準教諭に就任した操さんが、それ以来の一六年間、一九四〇年の早春三十一歳のれっきとした「地方研究者」として認められるに至った業績を引っ提げて、明大専門部入学をめざして津軽海峡を渡るまでの経緯が、淡々とかつ仔細に語られているのだが、それが単なる想い出・自慢話の域を越えて、ご本人の持つ卓抜した記憶力と冷静な判断力の滲み出た、いかにも迫真力に満ちた見事な自己記録となっているのに驚かされるのである。その内容の詳細をここに紹介する余裕がないのは残念であるが、以下、紙数の許すかぎりで二三の点に触れてみることにしたい。

その第一は、操さん自身が網走の「少年教師」時代に身に付けた、辺境に住む人々の郷土に根ざした目線、言い換えれば《地域人の視点》とでも呼ぶべきものを、生涯にわたる教育と研究の第一線において断固として保持し続けたことである。それはまず「郷土研究をもととした人間教育」により子供たちの能力を引き出すことに全力投球してきた誇り、そしてまた「学び問うことへの意欲を無言のうちに与えてくれた」先輩同僚の人々から吸

る。

地理学専攻の将来にむけて

優に半世紀を越える地理学教室の歩みをふり返ってみて、ここに取上げたのはほんの二三齣の断面に過ぎない。それにしても、われわれの受け継いだ学風の中には、ここで触れたもののほかにも、まだまだ多様で味わいの深いものが多々含まれているであろう。そうした良き学風の伝統をもっと掘り起こして、今後やって来る次の世代の人々のためにも、ぜひ将来にむけて発展的に継承してほしいと考える。

最後に、全く私人の個人的な感想なのだが、ひとつ近い将来ぜひ検討の俎上に乗せて頂きたいと思う要望がある。それは、地理学専攻としての紀要の問題である。幸いこれまでは、数年に一度『駿台史学』の地理学特集号がそれに割り当てられてきた。しかし、何と言っても本誌は歴史学界の専門誌であり、地理学の中でも専門とする分野によっては、雑誌の性格に馴染まない点がある。投稿発表の意欲をそがれてしまう傾向が無きにしても、非ずと見受けられ、残念で仕方がないのである。そこで、

取した学問への情熱によって支えられながら、みずから練磨し獲得してきた視点であったものと推察される。

第二に、操さんは、自分の生まれ育った網走・北見地方をフィールドにして、とにかく知らない処はないくらい自転車で現地を歩き、郷土史家や農家を訪ねて話を聞き、統計を調べて確かめるといふ、まさに《体当たりの地域研究》を徹底的に実行する中で、早々に自己の研究姿勢をまず確立されたのである。そしてこれを武器として地域の個性の探究に分け入り、それが何故どのようにしてそうなったのかの考察に進むという、まさに地域研究の正攻法を自らの方法論として教育と研究の全面にわたって堅持し実践するとともに、その面白さと重要性を学生たちにも強調してやまなかったのである。

何れも、言ってみれば当たり前の初歩的なことのように聞こえるかもしれないし、またその後の内外における地理学方法論のさまざまな分化や展開を考慮に入れて考えてみるとしても、なおかつ、これらはまさに、われわれにとって大切な基本的視点・あるべき研究姿勢として、地理学を学ぶ場合に繰り返し立ち戻って考えてみるべき原点を示してくれているのではないかと思われるのであ

例えば雑誌大判化の機会を捉えて、現行の特集号を形の上でも《地理学紀要》として明確化させる（但し、副題に『駿台史学』の特集号であることを明記する）という案などは如何であろうか。インキュベータとしての駿台史学会の仕上げ段階の仕事のひとつに、ぜひこの点を検討課題として加えて頂きたいものと願ってやまない。

〔注〕

(1) 『資料・文学部の軌跡と大学紛争 一九五四～一九七一』(明治大学文学部五十年史資料叢書 XII)、一九八二年八月三十一日、三〇六頁。

特に、II・昭和四十四年「大学立法」紛争、参照。地理学専攻に関係のある記録は、一八四～一九五頁、および二四八～二五一頁に収録されている。

(2) 『明治大学文学部五十年史』同編纂委員会編、一九八四年三月三十一日、五六三頁。

『明治大学文学部五十年史資料叢書・I～XII』同編纂委員会編、一九七八年五月～一九八二年八月、一二冊。

(3) 岡山俊雄・「記録」明治大学文学部地理学教室の歩み——文科専門部史学科・地理歴史科時代——『駿台史学』第三五号(一九七四年九月)、六八～八〇頁。

(4) 『地歴科時代』(明治大学文学部五十年史資料叢書 VI)、一九八〇年三月二五日、一一三頁(岡山俊雄・宗京奨三・

木村礎三氏の座談会記録。

(5) 松田孝・教室小史・地理学専攻、前掲注(2)『明治大学文学部五十年史』一九八四年 所収、四九二〜五〇〇頁参照。

(6) 『地歴科から史学地理学科へ』(明治大学文学部五十年史資料叢書 K)、一九八一年三月二五日、六四頁参照。

(7) オギユスタン・ベルク著篠田勝英訳『風土の日本』(ちくま学芸文庫版)筑摩書房、一九九二年九月、四二八頁(原書は一九八六年)。

(8) 岡山俊雄・渡辺操さんを悼む、『駿台史学』第二六号(一九七〇年三月)、二二一〜二二六頁。

(9) 渡辺操先生を偲ぶ会編『渡辺操先生追懐文集』(明治大学文学部地理学教室)、一九八〇年三月、六四頁。

(10) 渡辺操…一地理学者の生涯・回想(1)〜(9)、『北海道教育評論』(札幌市)、一九六五年一〇月号〜一九六七年三月号連載、延二一九頁。

(明治大学名誉教授)

69, 121-168
 山田 昌久
 48, 77-92
 山地 章三
 12, 125-129
 山根 幸夫
 89, 35-54
 山上 正太郎
 11, 62-81 20, 69-95
 山内 邦夫
 25, 20-56 28, 80-85
 湯浅 治久
 77, 1-41
 油井 大三郎
 37, 1-48 42, 67-116
 51, 183-243
 由井 将雄
 87, (67)-(92)
 横山 啓一
 86, 54-100 95, (28)-(52)
 横山 十四男
 29, 26-46
 横山 秀司
 54, 95-119 77, 71-99
 吉田 格
 9, 84-104
 吉田 文夫
 12, 91-112
 吉田 優
 56, 81-109
 吉武 佳一郎
 34, 27-70
 吉村 武彦
 92, (73)-(111)
 米倉 豊
 22, 86-110
 米田 稔
 1, 6-26 4, 1-25
 米村 衛

58, 25-45 60, 118-132
 若狭 徹
 84, 16-61
 渡辺 隆喜
 17, 62-92 23, 87-107
 33, 33-70 42, 19-66
 50, 131-172 65, 142-169
 67, 1-37 88, 1-35
 90, 214-252
 渡辺 保
 3, 18-27 7, 173-178
 13, 140-144 16, 180-185
 渡辺 操
 1, 76-120 5, 1-17
 10, 238-243 12, 36-73
 14, 163-189 21, 50-99
 渡邊 世祐
 1, 1 1, 2-5
 2, 1-12
 安 秉直 (AHN Byong Jick)
 80, 1-38
 ハリナン, T. (T. HALLINAN)
 11, 08-031
 韓 国磐 (HAN Kuop' an)
 70, 124-154
 姜 徳相 (KANG Duk-sang)
 17, 118-139 19, 78-106
 コタンスキ, ヴィエスワフ
 (Wiesław. KOTAŃSKI)
 68, 1-28
 文 純実 (MOON Soon-sil)
 96, 83-114
 朴 孝信 (PAK Hio-sin)
 19, 23-47
 李 進熙 (REE Jin Hee)
 6, 97-101 10, 229-237
 50, 96-110
 徐 台洙 (SUH Te-su)
 9, 118-122 19, 48-66